岡山市長賞（中学校・最優秀賞）

新聞感想文の部

言葉と勇気が変える世界

岡山市・岡山大付属中１年　横山　未侑

「マララさん、史上最年少十七歳でノーベル平和賞受賞」私はこの記事に強い衝撃を受け、引き込まれていった。マララ・ユスフザイさんとはどのような人なのか。どうしてこの一人のあどけない少女の一言が、大きな世界を動かせたのだろうか。

マララさんはパキスタンのイスラム過激派により女子教育が抑圧された地域の出身。彼女は夢に向かって学ぶことを強く望んでいた。そこで彼女は女子教育の権利を求め、活動を始めた。当時の状況下でその一声を上げることが、どれ程危険なことか。しかし、彼女はその道を選んだ。そして二〇一二年、彼女は下校中に銃撃され、奇跡的に一命を取り留めた。こんな目に遭って、活動はもうやめておこう、多くの人はそう思うであろう。だが彼女の勇気は止まることを知らなかった。どんな力にも屈することのなかった彼女の姿は、世界中の人々の心に強く響いた。

多くの人々に自分の思いを伝え、動かすことは容易ではない。まして誰も声を上げない時に最初に声を上げ、皆の気持ちを一つにすることはとても難しく勇気のいることだ。私自身、学校で学級代表や委員長を経験し、何度もその難しさを感じたことがある。マララさんの発言には人々を動かす強い思いと、聞く者を引き寄せる力があった。何よりも銃弾などの暴力にも屈することなく声を上げ続けた彼女の勇気は、本当に凄いと思った。一冊の本とペンで世界を変えられるという彼女の揺るぐことのない信念が世界を動かしたのだ。十代の一人の少女の言葉だからと侮ることなく耳を傾け、それを真剣に受け止め、世界の全ての子供達の為にと、史上最年少でのノーベル平和賞受賞を決定した判断もまた素晴らしいと思った。

今一度、私達は考えなければならない。日本では子供達全員が教育を受けられる。たくさんの友達と一緒に学校で学ぶ楽しさを知っている。自分の希望する学校を選ぶことができるし、自分の夢に合った学校へも行くことができる。社会全体が私達の夢を、それへ向けた学びを応援してくれる。それがどれ程幸せで恵まれた環境にあるかということを忘れてはいないだろうか。当たり前に教育が受けられる現状に甘えてはいないだろうか。自らの命を懸けてでも学校へ行きたい、勉強をしたい、将来の夢を実現したいと立ち上がったマララさんに、恥ずかしくない学校生活を送ることができているだろうか。毎日、真剣に勉強に取り組んでいるだろうか。将来の夢に向かって前進しているだろうか。恵まれた環境にいる私達こそもっと一生懸命に勉強し、夢を実現させ、世界中の子供達の為に、弱い立場の人達の為に、声を上げて協力して立ち上がらなければならないのではないか。私達が今するべきことは何か、真剣に考え、行動しなければならないと思う。

私は学校が大好きだ。多くの友と助け合い、時には競い合い学んでいくことはとても楽しく素晴らしいことだ。学校という場で仲間達と共に学び、共に笑い、共に泣くたくさんの日々に無駄なものは何一つない。いつの日か世界中の全ての子供達が学校で学び、夢を実現できる日が来ることを心から願う。

マララさんノーベル平和賞

17歳、史上最年少

女子教育の権利訴え

児童救済 インドの活動家も

2014年10月11日付　山陽新聞

寸　評

女子教育への権利を訴えノーベル平和賞を受けたマララさんの記事に着目し、かけがえのない自らの学校生活への思いをかみしめています。〝当たり前の日常〟への感謝の気持ちが伝わってきます。

2015年2月21日 山陽新聞朝刊 103ページ (C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。